

OPAC 通信

Transforming Okinawa's Heart into Action

Okinawa
Peace Assistance
Center



特定非営利活動法人
沖縄平和協力センター (OPAC)
沖縄県那覇市久米 1-5-18 稲福ビル 201-B
TEL (098) 866-4635 / FAX (098) 866-4638
www.opac.or.jp
(<http://blog.livedoor.jp/opac/>)

2011. November

OPACのロゴマーク
沖縄を飛び出し世界の
現場で活躍することを
イメージしました。

東ティモールへ専門家派遣

OPACが読谷村と提携し実施している、JICA草の根技術協力事業「沖縄・東ティモール・コミュニティー紛争予防協力」。今月中旬には、2年目を迎える本事業の一環として、東ティモールのコモロ村へ読谷山花織事業協同組合から専門家を派遣しました。東ティモールの伝統織物「タイス」の品質向上と若者の雇用創出による紛争予防を目的とした今回の専門家派遣では、本事業のモデル村であるコモロ村でタイス織り手への技術指導を行いました。また、地元でのタイス産業を把握するためタイス・マーケットの視察も行いました。

読谷山花織事業協同組合として厳しい品質規定を設定し品質管理に努めている専門家の説明に、研修に参加した現地のタイスの織手らは真剣に耳を傾けました。また、技術指導では、現地の参加者が「機結び」の方法を会得し、タイス製作の技術向上に目に見える成果をもたらすことができました。作業工程の簡略化などに高い関心を示す現地の織手らに対し、指導する専門家は「織物とは風土や生活に根差したものであり、伝統を守りつつ、現代のティモール人が地機で作るタイスこそが優れた織物であるということに自信と誇りを持って欲しい」と伝えました。



読谷山花織専門家の指導を熱心に聞き入る研修参加者（コモロ村）

第4回 OPAC 防災講座開催



11月25日、佐々木秀章氏（沖縄赤十字病院救急部長）を講師にお迎えし、「東日本大震災：医療救護の現実から学ぶ」をテーマに、第4回 OPAC 防災講座～東日本大震災から学ぶ～を那覇 JC 会館で開催しました。

日本 DMAT インストラクターでもある佐々木氏は、ご自身の出身地の宮城県で実際に携わった災害直後の医療救護現場の状況について報告。災害時、病院は入院患者の安全確保と保護を最優先とするため、備蓄している水や食料、医療物資を外へ分配することは極めて困難であるとのことでした。

さらに、特に今回のような大規模災害では、重症を負った患者は後から搬送されてくることから、医療機関は自力で早期に病院までたどり着ける軽傷患者への対応を制限せざるをえないことが説明されました。また、救出された重症患者の搬送や物資の移送に飛び交うヘリコプター同士の通信手段や着陸場所が制限される中、地上からパイロットに直接指さして着陸指示を出していたことなどが紹介され、災害医療の現実と課題が浮き彫りになりました。

最後に、佐々木氏は、災害時に頼るべきは医療機関や公共機関ではなく、地域の繋がりに基づく互助協力であること、一人一人が自らの力で「生き残る」という覚悟と決意を持って災害に備えることが大切だと強く訴えました。